

○毘沙門天王和讃

光明院興潮和尚編

頭 敬礼北方護世者 吠室羅摩拏威徳天

上付 為度衆生作鬼おう 示現天帝一方臣

本是往古の佛なり 下 宝処に至りて歳ひさし

上 弘誓なおし尽きざれば 三有に帰りて生を利す

則 真如の都いで 下 後得大悲の郷に入り

上 妙高半腹有財城 歡喜宮に住みたもう

城をさる事遠からず 下 苑あり普光苑という

上 則一人の天女あり 名をば吉祥天という

夫人亦是大薩埵 下 或は初地第八地

上 むかし佛に親近し 多くの誓願立てたもう

形は即ち五障身 下 心は一子の大慈悲

上 閻浮にちぎり厚うして 財宝ねがいに施与す

むかしの誓願力により 下 女身慈悲の姿にて

上 佛法修行する人に 一切資縁授与す

禪賦師童子は天王と 誓いを同く立てたもう

能化所化の中にして 詞を通わす愛子なり

今此多聞天王に 頼みをかけて念ずれば

一切所願ことごとく おもいに随え満たもう

浄信持戒及多聞 下行捨愛樂並智慧

形貌色力巧弁財 五妙境界諸快樂

先は此等の一切の 善願円満成就して

終には浄土菩提に 必ず引摂垂れたもう

或は常に無量の 夜叉神ともろともに

佛道もとむる人をして 護に来れる時には

大悲の鎧身をかざり 忍辱かぶとを首に着

解脱の衣色をかえ 塵垢の服に染めなせり

左の手には毘盧遮那の 三昧塔廟捧げたり

右には三世の諸佛の 大智の宝棒執持せり

慈悲の眼は仮初に 夜叉神にかたどれり

大定縁如の月の貌 降魔の為に曇あり

凡釋迦の弟子として 佛法ならう人あらば

男女老少皆ながら 常に此天念ずべし

我等が此身の楽しみは 天王加被の力にて

萬の妨さらになく 昼夜に佛事を勤よ

南な無む護ご世せ威い徳とく天てん 下わがこの我わが此このさんだん功く徳とくに

上ぐせいかなら弘く誓せ必かならずあやまらず 哀あい愍みん守しゅ護ごしたまえ

擁おう護ご佛ぶつ法ぽう令りやう久く住じゅう 下にやうやくしゅじやう饒にやう益やく衆しゅ生じやう無む窮ぐう尽じん

上ごお恒お於にんげん人き間き起じ慈ひ悲ひ 自じ身しん眷けん属ぞく離り諸しよ難なん

願がん共ぐ諸しよ衆しゅ生じやう 下どうにゆう同どう入に不ふ二に門もん